

研究者と巡るセメント美術

美術史研究者 坂口英伸

No.23 花井探嶺

これから数回にわたって、花井を紹介したい。花井は「放浪の仏師」と評され、その正確な足取りや制作実態を把握することは難しい。花井は1879（明治12）年2月28日、現在の三重県三重郡菰野町に坂倉房蔵・まつ夫妻の五男、「坂倉芳五郎」として出生した。幼きころより手先が器用だったという芳五郎は、左官職人だった長男の鉄次郎から左官や鰻絵などの技術をじかに学んだようだ。おそらく10代後半から20代前半ごろ、芳五郎は郷里を離れて常滑に出て、常滑美術研究所で西洋彫刻を基にした彫刻技術を学んだとされている。そして1904（明治37）年に素封家の娘・花井たねと結婚してからは、花井姓を名乗りはじめ、探嶺という号も使い始める。結婚後も花井は住居が定まらず、愛知県内を転々としたようで、この後の約15年の足取りは掴めない。

そして満40歳となる1920（大正9）年には、欧州旅行に出かけてパリに立ち寄り、本場の西洋彫刻を見聞したと伝わる。帰国後の1922（大正11）年、花井の前半期の代表作となる噴水彫刻《ちから》をセメントで制作した。本作は3人の男性労働者が歯車を担ぐプロレタリア的作品で、像高3.1m、重量3.75tという量塊と量感に満ちた大作であった。これ以降、花井の制作活動が徐々に明らかとなってくる。

花井にとってのターニングポイントが関東進出の機会を得た1925（大正14）年である。養玉院如来寺（東京都品川区）から制作依頼を受けたのである。依頼の経緯は不明だが、「大井の」として知られる同寺の本尊である《五智如来像》の台座と光背を、花井はセメントで華麗に仕上げた（図1）。《五智如来像》を安置する如来堂（瑞應殿）の内部に整然と横一列に並ぶ5体の仏像は、いずれも木像（寄木造、像高約3m）で、江戸時代前期から中期の作である。つまり如来像（江戸時代）に台座と光背（大正時代）という素材も自在も異なる要素がミックスされているのである。後補であるセメント製の台座と光背には、像本体との調和を企図するべく着色が施されており、セメントと木材という対照的な異素材の組み合わせだが、違和感がほとんどない。本像は品川区より彫刻第7号として文化財に指定されている。

如来堂には、本尊に加えて花井の作品が陳列されている。如来像の台座と光背を皮切りに同寺は、《観音像》《毘沙門天像》《天燈鬼像》（一對）花瓶（一對）など、多種多様な作品の制作を花井に依頼したからである。作品の一部には「探嶺作」と刻まれた署名を確認できる。また本堂の内部にも、花井が手掛けた住職夫婦の胸像などが大切に保存されている。同寺の花井への信頼が大きかった証左ともいえよう。

注目すべきは1930（昭和5）年に制作された《宝篋印塔》（セメント製）である（図2）。梵字・蓮華・四天王・飛天・鬼などのさまざまなモチーフから構成される同塔は、見事な構成力でまとめ上げられ、花井の高い技術力が如実に伝わってくる。

最後に次稿で紹介する予定である天龍寺（埼玉県飯能市）の《仁王像》について、簡潔に付言したい。これは高さ4mを誇る鉄筋コンクリート造の仏像で、参道の両脇に置かれており、花井の代表作ともいえる大作である。養玉院如来寺の住職の証言によると、養玉院如来寺と子ノ権現天龍寺の住職が親戚関係にあったため、天龍寺より花井に対して《仁王像》の制作依頼がなされたという。それでは次の原稿で《仁王像》をみていこう。



図1 如来堂（瑞應殿）に安置された《五智如来像》



图2 《宝篋印塔》